高橋晴邦氏

田中健二郎氏

瀬明氏は、インディ500取材でやぐらが倒れて大怪我をし、手痛い洗礼を受けた。その前妻、**ジェーン・マセ**氏は、長らくレポーターとしてインタビュー記事を手がけてくれた。パドックではその美貌で人気を博した。

日本でも馴染みの深い**フランコ・リーニ**氏は、23（大正12）年生まれのベテラン・ジャーナリスト。報道カメラマンから2輪雑誌の編集長、そして**エンツオ・フェラーリ**に見込まれてフェラーリのチーム・マネージャーに大抜擢。再びジャーナリストに戻った国際派だ。『モーターファン』にも写真とレポートを寄稿していた。

同世代の海外ライターで**ダグ・ナイ**や**イワン・ヤング**も忘れてはならない存在だ。毎週のように細かなレポートを送り、『AUTOSPORT』の誌面を飾ってくれた。

は、67（昭和42）年のことだった。その時の彼の情熱があったからこそ、あとに続く日本のF1カメラマンがあったのだ。

そのジョー・ホンダを温かく支えてくれたのが片腕のカメラマン、**H・ビーゼンバーガー**。彼はヨーロッパのF1プレスクラブの創始者でもある。鈴木脩己社長（当時）も、初めてのモナコGP取材ではお世話になったという。

今も活躍するカメラマン**間**

ジョー・ホンダ氏

赤井邦彦氏

ビル大友氏

カメラマンとしては2008（平成20）年に亡くなった**ベルナール・カイエ**氏と、その息子、**ポール-アンリ・カイエ**氏のレースシーンを切り取った写真は見事だった。

また、サットン・フォトグラフィックの創立者、**キース・サットン**氏も若き頃、直接日本の編集部に売り込みにきたガッツ溢れる若者だった。**アイルトン・セナ**が英国フォーミュラ・フォード1600選手権を戦っていた頃、その才能に目をつけて自ら広報カメラマンを担当し、セナとともにF1の世界でビッグになっていったサクセス・ストーリーの持ち主だ。日本の『AUTOSPORT』にコラムを連載し、鈴鹿サーキットのF1グランプリでは女性ファンにサイン攻めにあっていた記憶もある。サーキットの女性写真は、彼が先駆者か。

80年代に入ると、日本のジャーナリストやカメラマンもようやく活躍するようになってきた。**赤井邦彦**氏は初期の『AUTOSPORT』の契約編集部員だったが、オーストラリアのタスマン・シリーズの取材を機に、フリージャーナリストとして海外を活躍の場に選び、現在ではF1ジャーナリストの重鎮となっている。また、同じ頃に人気コラムニストであったのは、**ビル大友**氏。本業は建築家だが、オートモビルをもじったペンネームと広い知識からF1ブーム誘致の原動力になった。

フジテレビF1ブームを作り上げた功労者のひとりでもある

75（昭和50）年ごろの駆け出しが、**ジェフ・ハッチンソン**氏。イギリス生まれの彼は、F1取材のためにフランスに居を移し、ワーゲン・デリバンで大陸を駆け回っていた。IRPA（インターナショナル・レーシング・プレス・アソシエーション）の会員として活躍し、日本のF1ブームの頃には、様々なドライバーのコラムを代筆するようになっていた。